

「お兄ちゃん、おばあちゃんのことだけど、この頃かなり物忘れが激しくなったと思わない。僕に、何度も同じことを聞くんだよ。」

「うん。今までのおばあちゃんとは別人のように見えるよ。いつも自分の眼鏡や財布を探しているし、自分が思い違いをしているのに、自分のせいではないと我を張るようになった。おばあちゃんのことでは、お母さん、かなり参っているみたいだよ。」

弟の隆とそんな会話を交わした翌朝の出来事であった。

「お母さん、僕の数学の問題集、どこかで見なかった。」

「さあ、見かけなかったけど。」

「おかしいな。おととい、この部屋で勉強した後、確かにテレビの上に置いといたのになあ。」

学校へ出かける時間が迫っていたので、僕は段々いらいらして、祖母に言った。

「おばあちゃん、また、どこかへ片付けてしまったんじゃないの。」

「私は、何もしていませんよ。」

そう答えながらも、祖母は部屋のあちこちを探していた。母も隆も問題集を探し始めた。しばらくして、隆が隣の部屋から誇らしげに問題集を持ってきた。

「あったよ、あったよ。押入の新聞入れに、昨日の新聞と一緒に入っていたよ。」

「やっぱり、おばあちゃんのせいじゃないか。」

「どうして、いつも私のせいにするの。」

祖母は、責任が自分に押し付けられたので、さも、不満そうに答えた。

「そうよ、何でもおばあちゃんのせいにするのはよくないわ。」

母が、僕をたしなめるように言った。僕は、むっとして声を荒げて言い返した。

「何言ってるんだよ。昨日、この部屋の掃除をしたのはおばあちゃんじゃないか。新聞と一緒に問題集も押入に片付けたんだらう。もっと考えてくれよな。」

「そうだよ。お兄ちゃんの言うとおりだよ。この前、僕の帽子がなくなったのも、おばあちゃんのせいだったじゃないか。」

「しっかりしてよ、おばあちゃん。近頃、だいぶぼけてるよ。僕ら迷惑してるんだ。今も隆が問題集を見付けなかったら、遅刻してしまうところじゃないか。」

いつも被害にあっている僕と隆は、一斉に祖母を非難した。祖母は、悲しそうな顔をして、僕と隆を玄関まで見送った。

学校から帰ると、祖母は小さな机に向かって何かを書き込んでいた。僕には、そのときの祖母の寂しそうな姿が、なぜかいつまでも目に焼き付いて離れなかった。

祖母は、若い頃夫を病気で亡くした。その後、女手一つで4人の息子を育て上げる傍ら、民生委員や婦人会の係を引き受けるなど地域の活動にも積極的に携わってきた。そんなしっかり者の祖母の物忘れが目立つようになったのは、65歳を過ぎたここ1、2

年のことである。祖母は、自分は決して物忘れなどしていないと言い張り、家族との間で衝突が絶えなくなった。それでも若い頃の記憶だけはしっかりしており、思い出話を何度も僕たちに聞かせてくれた。このときばかりは、自分が子供に返ったように目を輝かせて話をした。両親が共働きであったことから、僕たち兄弟は幼い頃から祖母に身の回りの世語をしてもらっており、今でも何かと祖母に頼ることが多かった。

ある日、部活動が終わって、僕は友達と話しながら学校を出た。途中の薬局の前で、友達の1人が突然指差した。

「おい、見ろよ。あのばあさん、ちょっとおかしいんじゃないか。」

「本当だ。何だよ、あの変てこりんな格好は。」

指差す方を見ると、それは、季節外れの服装にエプロンをかけ、古くて大きな買い物籠を持った祖母の姿であった。確かに友達が言うとおり、その姿は何となくみすぼらしく異様であった。僕は、慌てて祖母から目を離すと辺りを見回した。道路の向かい側で、2人の主婦が笑いながら立ち話をしていた。僕には、2人が祖母のうわさ話をしているように見えた。

祖母は、擦れ違ふとき、ほほ笑みながら何かを話し掛けた。しかし、僕は友達に気付かれないように、知らん顔をして通り過ぎた。友達と別れた後、僕は急いで家に帰り、祖母の帰りを待った。

「ただいま。」

祖母の声を聞くと同時に、僕は玄関へ飛び出した。祖母は、大きな買い物籠を腕にぶら下げて、汗を拭きながら入ってきた。

「ああ、暑かった。さっき途中で会った2人は…。」

「おばあちゃん。何だよ、その変な格好は。何のためにふらふら外を出歩いているんだよ。」

僕は、問い詰めるような厳しい口調で祖母の話を遮った。

「何をそんなに怒っているの。買い物に行ってきたことぐらい見れば分かるでしょ。私が行かなかつたら誰がするの。」

「そんなことを言っているんじゃない。みんながおばあちゃんのことを笑ってるよ。かっこ悪いじゃないか。」

「そうして、みんなで私をばかにしなさい。一体どこがおかしいって言うの。誰だって年を取ればしわもできれば白髪頭にもなってしまうものよ。」

祖母の言葉は、怒りと悲しみで震えていた。

「そうじゃないんだ。大体こんな古ぼけた買い物籠を持って歩かないでくれよ。」

僕は、腹立ちまぎれに祖母の手から買い物籠をひったくった。

「どうしたの、大きな声を出して。おばあちゃん、僕が頼んだ物ちゃんと買ってきてくれた。」

「はい、はい。買ってきましたよ。」

隆は、買い物籠を僕から受け取ると、さっそく中身を点検し始めた。

「おばあちゃん、ばんそうこうと軍手が入ってないよ。」

「そんなの書いてあったかなあ。えーと、ちょっと待ってね。」

祖母は、あちこちのポケットに手を突っ込みながら1枚の紙切れを探し出した。見ると、それは隆が明日からの宿泊学習のために祖母に頼んだ買い物リストであった。買い忘れないように、祖母の手で何度も鉛筆でチェックされていた。

「やっぱり、ばんそうこうも軍手も、書いてありませんよ。」

「それとは別に、今朝、買っておいでくれるように頼んだだろう。」

「そんなこと、私は聞いていませんよ。絶対聞いていません。」

「あのね、おばあちゃん。…。」

隆は、今にもかみつくような顔で祖母をにらんだ。

「もうやめろよ。おばあちゃんは忘れてしまったんだから。」

「なんだよ。お兄ちゃんだって、さっきまで、おばあちゃんに大きな声を出していたくせに。」

僕は、不服そうな隆を誘って買い物に出かけた。道すがら、隆は何度も祖母の文句を言った。

その晩、祖母が休んでから、僕は今日の出来事を父に話し、何とかならないかと訴えた。父は、僕と隆に、先日、祖母を病院に連れて行ったときのことを話し出した。

「お前たちが言うように、おばあちゃんの記憶は相当弱くなっている。しかし、お医者さんの話では、残念ながら現在の医学では治すことはできないんだそうだ。これからもっとひどくなっていくことも考えておかなければならないよ。おばあちゃんは、おばあちゃんなりに一生懸命やってくれているんだからみんなで温かく見守ってあげることが大切だと思うよ。今までのように、何でもおばあちゃんに任せっきりにしなくて、自分でできることぐらいは自分でするようにしないといけないね。」

「それは僕たちもよく分かっているよ。だけど…。」

これまでの祖母のことを考えると、僕はそれ以上何も言えなくなった。

その後も、祖母はじっとしていることなく家の内外の掃除や片付けに動き回った。そして、物がなくなる回数はますます多くなった。

ある日、友達からの電話を受けた祖母が、伝言を忘れたため、僕は友達との約束を破ってしまった。父に話した後怒らないようにしていた僕も、このときばかりは激しく祖母をののしった。

それから1週間余り過ぎたある日、探し物をしていて僕は引き出しの中の一冊の手あかに汚れたノートを見付けた。何だろうと開けてみると…

それは、祖母が少し震えた筆致で、日頃感じたことなどを日記風書きつづったものであった。見てはいけないと思いながら、つい引き込まれてしまった。最初のページは、物忘れが目立ち始めた2年ほど前の日付になっていた。そこには、自分でも記憶がどうにもならないもどかしさや、これから先どうなるのかという不安などが、切々と書き込まれていた。普段の活動的な祖母の姿からは想像できないものであった。しかし、

そのような苦惱くのうの中にも、家族と共に幸せな日々を過ごせることへの感謝の気持ちが行間にあふれていた。

『おむつを取り替かえていた孫が、今では立派な中学生になりました。孫が成長した分だけ、私は年をとりました。記憶も段々弱くなってしまい、今朝も孫にしかられてしまいました。自分では気付いていないけれど、他にも迷惑めいわくをかけているのだろうか。自分では一生懸命けんめいやっているつもりなのに…。あと10年、いや、せめてあと5年、何とか孫たちの面倒めんどうを見なければ。まだまだ老け込こむわけにはいかないぞ。しっかりしろ。しっかりしろ。ばあさんや。』

それから先は、ページを繰くるごとに少しずつ字が乱れてきて、判読もできなくなってしまった。最後の空白のページに、ぽつんとにじんだインクの跡あとを見たとき、僕ぼくはもういたたまれなくなって、外に出た。

庭かたすみの片隅でかがみこんで草取りをしている祖母の姿が目に入った。夕焼けの光の中で、祖母の背中いくぶんは幾分小さくなったように見えた。僕は、黙だまって祖母と並んで草取りを始めた。

「おばあちゃん、きれいになったね。」

祖母は、にっこりとうなずいた。